

研究動向

## フランス地理言語学と言語地図 誕生から現状まで

川口裕司<sup>1</sup> 伊藤玲子<sup>2</sup> 清宮貴雅<sup>2</sup> 大河原香穂<sup>2</sup>

東京外国語大学<sup>1</sup>

東京外国語大学大学院博士後期課程<sup>2</sup>

## French Geolinguistics and Linguistic Atlases From nascency to the status quo

KAWAGUCHI, Yuji<sup>1</sup> ITO, Reiko<sup>2</sup> SEIMIYA, Takamasa<sup>2</sup> OKAWARA, Kaho<sup>2</sup>

Tokyo University of Foreign Studies<sup>1</sup>

Doctor Course, Tokyo University of Foreign Studies<sup>2</sup>

**Abstract:** This report on research trends gives a brief sketch of the history, development, and status quo of French geolinguistics. The first chapter defines the language distribution within and outside France. In the second chapter, the nascence of French geolinguistics as a new branch of linguistics and the importance of *Atlas linguistique de la France* are considered. We also highlight the contribution of Albert Dauzat in disseminating geolinguistic theory and methods not only to dialectologists but also to researchers from a broader field. The following chapter depicts the relation between the extension of standard French in the early 20th century and the new projects of the *Atlas linguistiques de la France par régions*. Today, the main research subjects related to French geolinguistics are the studies of ancestral forms, that is, patois and of regional French forms. The fourth chapter describes the emergence of full-scale studies of regional French in the 1970s. The fifth chapter focuses on the digitalization of pre-existing linguistic atlases as corpus. Some notable digitalized atlases are given as examples. The last chapter explores the on-going attempts of constructing two comparative linguistic atlases: *Atlas Linguarum Europae* and *Atlas Linguistique Roman*. In conclusion, we addressed some current concerns of French geolinguistics.

**キーワード:** 言語地図, 言語地理学, 地理言語学, 地域フランス語

**Keywords:** linguistic atlas, linguistic geography, geolinguistics, regional French

---

川口裕司、伊藤玲子、清宮貴雅、大河原香穂 (2021) 「フランス地理言語学と言語地図 誕生から現状まで」  
『地理言語学研究』 1: 146–163. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.5529358>

## 1. はじめに

この研究動向では、フランス地理言語学がどのように誕生し、成長発展しながら、現在に至っているのかを、言語地図の編纂を中心に据えながら概説する。最初にフランス共和国（以下フランス）における言語区分について確認しておこう。一般的な区分は図1のようになる。



図1 フランスにおける言語区分 Bert et Costa (2009: 13) を編集

フランス語史の観点から、フランスは一般に北部のオイル語域 (langue d'oïl)、東部のフランコプロヴァンス語域 (francoprovençal)、南部のオック語域

(occitan) に三分割される。これら三地域のうち、前者の2つが本稿の主な対象地域になる。

フランスの周辺には、スペインとの国境に位置し、スペイン側に広がるカタルーニャ語域 (catalan) があり、地中海にはフランス語とイタリア語の方言が話されているコルシカ語域 (corse) がある。また北部にはゲルマン語派に属するアルザス地方とモーゼル地方の諸口話 (parlers germaniques d'Alsace et de Moselle) があり、ベルギーに隣接してフラマン語域 (flamand) がみられる。このほか北西部にはケルト語派に属するブルトン語域 (breton) があり、系統不明のバスク語域 (basque) も南西部に広がっている。さらに、ベルギー王国、スイス連邦、カナダ連邦、フランス海外県などにもフランス語を母語として話す人々が大量にいるが、それらの地域についてはここでは触れない。

## 2. 地理言語学の誕生

「言語地理学 géographie linguistique」の創始者と言われるジュール・ジリエロン Jules Gilliéron は、高等研究実習院 (以下 EPHE) で 1883 年から亡くなる 1926 年までロマンス方言学 dialectologie romane の教授職に就いて、方言学のセミナーを担当した。言うまでもなく彼の最大の功績は、エドモン・エドモン Edmond Edmont と共に 1902 年から 1910 年にかけて出版した『フランス言語地図 *Atlas linguistique de la France* (以後 ALF) 』である。1897 年 8 月から 1901 年 8 月までの間に、8 回に及ぶ現地調査を行って、638 地点 (Saint-Pol-sur-Ternoise が 2 度調査されたため 639 地点とする研究者もいる) において、700 人以上から聞き取り調査をした。ALF は後の言語地図と異なり、エドモンが一人だけで調査を行っているため、収集されたデータを相互に比較する際の信頼度が高い。また、質問項目に対して被調査者が最初に発した回答を採用した点にも特色がある。被調査者は 10 代から 80 代の農業従事者、職人、保安官、郵便局員、村長、教師、旅館経営者、酒場経営者、老人、主婦などで、多くが 40 歳代の男性であった。調査地点はフランス本土はもとより、ベルギーのワロン地方、スイス西部、イタリア北西部、イギリスのチャンネル諸島まで含む。地点によっては複数の人から聞き取り調査を行った。東京外国語大学では語学研究所に ALF 全巻を所蔵しているが、実物を見たことがある者なら、その出版が当時いかに困難であったかは容易に想像がつく。方言形はルスロ・ジリエロン式と呼ばれる音声表記を用いて、そのまま地点ごとに記載されており、出版社泣かせであったことは間違いない。ほかの出版方法もあったのではないかと思われるほどである。実際、ALF が出版された当初からその内容に懐疑的であったフランスの文献学者ポール・メイエル Paul Meyer は、「ディーツ財団

Diez-Stiftung」の賞の選考を巡って、スイスの言語学者アドルフ・トブラー Adolf Tobler に宛てた書簡の中で、ALF の出版について次のように書いている。「私が ALF を編纂していたなら、地点を記載した四つ折りの白地図を出版し、方言形は県ごとに分類して地点番号とともにリスト化し、通常の書籍として出版していたであろう。」(Storost 1994: 77)。メイエルが本当にそうした案をジリエロンに助言したかどうかはわからないが、ジリエロンは現行の出版形態を強く希望したようである。ともあれ ALF は教育省からの補助金のほかに、パリ市と EPHE、さらに出版社のシャンピオンからも援助を得てなんとか出版に漕ぎつけたのだった。そして 1908 年にベルリン・アカデミーはジリエロンにディーツ財団賞を贈った。

このように言語地理学の創世期にスイス人のジリエロンが果たした役割は絶対的なものであった。また文献学者のガストン・パリス Gaston Paris がジリエロンのために EPHE に方言学講座を開設したことは英断であった。言語地理学の黎明期には、ジリエロンだけでなく、ほかにもスイス出身の研究者が活躍していたことをハンス・ゲーブル Hans Goebel が教えてくれる (Goebel 2017)。

こうして 20 世紀初頭のフランスで産声をあげた言語地理学は、少なくとも第二次大戦後あたりまで言語学における新たな研究分野として隆盛を極めた。アントワヌ・メイエ Antoine Meillet は、ジリエロンくらい歴史言語学に影響を与えた研究者はいないと述べ、『歴史言語学と一般言語学 *Linguistique historique et linguistique générale*』の第 1 巻に、「J. ジリエロンと地域口話研究がロマンス語化の発展に与えた影響」と題する章を設け、「こうして言語学にとって決定的な進歩が実現した。あらゆる歴史言語学は比較言語学的であり、同じ一つの共通言語から出た様々な口話の比較だけが、その共通言語を決定するのに役立つ。」(Meillet 1921:307) と称賛した。さらにメイエは、『歴史言語学における比較方法 *La méthode comparative en linguistique historique*』の第 6 章に「言語地理学 *Géographie linguistique*」というタイトルをつけ、「地理的方法を適用することができれば、どこでも決定的な進歩を得ることができる。(…) 比較方法は地理的方法によって、それまでにはない精緻さ、広がり、容易さを獲得する。」(Meillet 1925: 70) と述べている。エルンスト・ガミルシェク Ernst Gamillscheg も『言語地理学とその一般言語学に対する寄与 *Die Sprachgeographie und ihre Ergebnisse für die allgemeine Sprachwissenschaft*』の中で、ジリエロンの功績として 3 点を指摘した。①ALF を出版することで方言研究に新たな研究材料を提供した。②新しい地理的な観察方法を提案し、その方法を洗練させた。③EPHE でのセミナーを通じて後進を育てた (Gamillscheg 1928: 2)。後進たちのうち、シャルル・ブリュノ Charles Bruneau はアルデンヌ地方について、オスカー・ブロック Oscar Bloch はヴォージュ地方について、それぞれのやり方で ALF の調査方法と結果を検証している。

メイエが言うように、ジリエロンの発信力はあまり高くなかったようである (Meillet 1921: 305)。というのも蜜蜂の命名や同音衝突を中心とする重要な論考、さらに弟子たちと発表した一連の「言語地理学研究 *Études de géographie linguistique*」は、いずれも方言学の専門家に向けて書かれた論文であり、言語地理学を広く知られる研究分野にすることはなかった。言語地理学の理論と手法を、方言学者だけでなく、より広い読者に簡便に解説する任を担ったのはアルベール・ドーザ Albert Dauzat であった。『言語地理学 *La géographie linguistique*』(1922) は改訂を重ねることで、同分野を広く知られる研究分野にした。日本でも親しまれた『フランス語言語地理学』(松原・横山訳、大学書林、1958) は1944年版に基づいている。ドーザの初版からは100年の歳月が流れた。今日では、ル・デュ Le Dù、ル・ベール Le Berre、ブラン・トリゴ Brun-Trigaud の『ジリエロンとエドモンの ALF を読む 時間から空間へ *Lectures de l'Atlas linguistique de la France de Gilliéron et Edmont Du temps dans l'espace*』(2005)を参照することで、ALF の概略と様々な地図の解釈を知ることができるようになった。現在では ALF はオンライン化され、ネット上で言語地図を閲覧・ダウンロードできる (<http://lig-tdcge.imag.fr/cartodialect5/#/>)。調査地点の地名やインフォマントに関する情報などもオンラインで簡単に調べることができる。

### 3. 言語環境の激変と地域別言語地図

英国方言学者のダミアン・ホール Damien Hall が述べているように、フランス方言学の大方向の了解として、俚言 patois は「標準フランス語に進化することのなかった北部ガロ・ロマン地域の土着ロマンス語変種」を指す (Hall 2018: 474)。一般に俚言は社会的に狭く限られた田舎地域で用いられた。俚言には公的地位がなく、しばしば否定的評価を伴っていた。つまるところ俚言は、英国方言学者たちの言う「オイル・フランス語 Oil French」において、急速な標準語化が進む中で次第に消滅していった言語形とすることができる。ところで、本稿ではこのオイル・フランス語という用語をあえて使用することにするが、それはこの用語がオイル語域とフランコプロヴァンス語域の両方を含んだ地域の名称だからである。

オイル・フランス語において、標準語の波がいつ頃からどのように生じたのかというのは、地域における言語史的背景が異なっているため、全体的な説明をすることが難しい。とはいえこの事象について2006年にティム・プーリー Tim Pooley が優れた概説を発表した。ここではプーリーの説明をごく簡単に紹介する。ALF が出版された20世紀初頭、すでにパリを中心とする広い地域で「超地域的変種 supra-local variety」が見られた。オイル語域とスイスやイタリ

アと国境を接するフランコプロヴァンス語域では、いわゆる *patois* と考えられる「先祖代々の語形 *ancestral speech forms*」がすでに散発的に用いられるだけになっていた。当時そうした「伝統的なことば *traditional speech*」が例外的に用いられていたのは、ノルマンディーのコタンタン半島、ジュラ県のロン・ル・ソニエ *Lons-le-Saunier*、そしてブルゴーニュ南部のマコン *Mâcon* であった (Pooley 2006: 360 と 361 の地図)。プーリーはフランス語に特有で、定義の厄介な俚言という用語をわざと使用せずに、卑近な表現 (*ancestral, traditional speech form*) で言い換えながら説明している。

続いてプーリーは ALF から約半世紀後のオイル・フランス語の状況について述べる。1965 年以降、パリを中心とした超地域的変種の領域は、オイル語域を越えて南フランスにまで広がっていった (同上 385 の地図)。それ以外の周辺地域、コタンタン半島、ピカルディー地方、ベルギーと国境を接するアルデンヌ地方、アルザス地方やロレーヌ地方、スイスとイタリアとの国境地域では、「先祖代々の語形」や「伝統的なことば」ではなく、「オイル・フランス語の逸脱形 *Oil French divergent forms*」が用いられると記している。前にも述べたが、英国方言学者たちがオイル・フランス語と呼ぶ地域には、伝統的なオイル語域とフランコプロヴァンス語域の両方が含まれている点に注意すべきである。とくに 1965 年以降の北フランス全体の言語状況を考える時、この名称はある程度の正当性を持っていると言える。

20 世紀初頭、あるいは、それよりずっと以前から生じていた標準語化は、上記の超地域的変種が時とともに北フランス全域に拡大していったことを意味する。ドーザが命名したとされる「地域フランス語 *français régional*」は、まさにこの標準語化の現象と密接に関係する。

“ *Le français s’est d’abord implanté dans les centres urbains et dans les classes riches: modifié sous l’influence du milieu, il constitue ce que j’appellerai le français régional.*” (Dauzat 1906: 203)

「フランス語は、まず都市中心部と裕福な階層に定着した。そしてそのフランス語は環境の影響を受けて変容し、私が地域フランス語と呼ぶものを構成するのである。」

ドーザはさらに次の段階で、この地域フランス語が田舎地域に拡大していったと述べる。ドーザがこの用語を提案した経緯については、ジャック・ショーラン *Jacques Chaurand* が詳しく述べている (Chaurand 1992 [1985]: 387)。ドーザのこの定義は、その後、地域フランス語は「標準語化に失敗した語形」であるとか、「標準語化以前の地域性を表す語形」であるといった、様々な解釈と

誤解を生みだすことになり、学会において定着するのが遅れた。従って、地域フランス語の研究が本格化するのは 1970 年代に入ってからになる。

ALF が出版された後、1939 年になって、ドーザは 17 の言語地図から構成される「地域別フランス言語地図 *Atlas linguistiques de la France par regions* (以下地域別言語地図)」の構想を発表した。しかしその数ヵ月後に第二次世界大戦が勃発する。ドーザは地域別言語地図を国立科学センター (以後 CNRS) の事業として位置づけることに成功したものの、言語地図センターを創設するには至らなかった。そしてドーザは、リヨン言語地図がまず出版され、続いてガスコニュ言語地図の第一巻が発刊された翌年の 1955 年に逝去する。リーダーを失った地域別言語地図はマリオ・ロック *Mario Roques* とミシェル・ルジュヌ *Michel Lejeune* によって引き継がれ、ルジュヌはついに CNRS 内に言語地図委員会を設置した。ドーザの遺志はこうして無事引き継がれることになった。この経緯についてはシモーニ・オランブ *Simoni-Aurembou* の明解な説明がある (*Simoni-Aurembou* 2004)。このほか地域別言語地図の発刊が盛んになる 1970 年頃の方言状況、そして ALF から 1973 年までの地域別言語地図については、ガストン・テュアイヨン *Gaston Tuailon* の概説書が有益である (*Tuailon* 1976)。

ところで、ドーザが地域別言語地図を発案した背景には、おそらくドーザの先見の明とそれを支える強い思いがあった。ドーザは、フランス国内で急速な標準語化が進行する中で、失われゆく俚言の記録とともに、来るべき地域フランス語研究に向けた基礎資料を構築しておきたいと考えていたのだろう。ドーザのそうした意図が後進の人々に通じたにせよ、偶然の結果でそうなったにせよ、後に出版されたオイル・フランス語域の地域別言語地図の多くにおいて、都市部には地域フランス語と思われる語形がしばしば現れ、反対に田舎地域では伝統的語形が見られる。しかも驚くべきことに、伝統的語形はしばしば ALF よりも古い言語層を示しているのである。一見すると言語的に著しい不均衡が言語地図上に見られるわけであるが、そうした現象は、おそらくドーザの予見していた言語変化の結果からそれほど大きく乖離していないように思われる。

ところで、これまで「田舎地域」と書いてきたが、田舎村 *commune rurale* は人口 2000 人未満を指すという国立統計経済研究所 (*INSEE*) の規準をそのまま適用すると、ALF の 638 地点と地域別言語地図の各地点は、いずれもこの条件を満たさないようである (*Pooley* 2006: 362)。したがってここで言う田舎地域はあくまで相対的なものと理解する必要がある。

ドーザの地域別言語地図プロジェクトでは、ALF の対象地域に含まれていたベルギー、スイス、イタリアなどは除外され、代わりにロマンス語圏ではないアルザス地方、ロレーヌ地方、バスク地方が新たに組み込まれた。そして今回の言語地図は一人の調査者ではなく、各地域の言語・文化・歴史をよく知る複数の言語学者たちが各地域に固有の質問票を作り、現地調査を行った。地域

別言語地図が「言語民族誌地図 Atlas linguistique et ethnographique」と呼ばれることからわかるように、担当者は各地域に特有と考えられるモノや事象に関心の中心を移していった。結果として ALF と直接に比較対照することができる単語の数は著しく少なくなってしまう。ゲートルはドーザによる当初の規定が守られなかったせいだと書いているが、その真偽は明らかではない (Goebel 2013: 71)。いずれにしても、このことは非常に残念なことである。ただし地域別言語地図の方は、それぞれの言語地図が既刊の言語地図を参考にして調査項目を設定しているため、複数の言語地図に共通する語彙項目が採用されており、地域別言語地図同士を比較対照することは容易になっている (川口 2018)。地域別言語地図では、ALF の表記法を踏襲して、ルスロ・ジリエロン式の音声表記を使って、方言形が地図上に直接記載された。

地域別言語地図の刊行状況は Brun-Trigaud (2016) によると以下のとおりである。1990 年の時点で7つの地域別言語地図 (ブルゴーニュ地方 ALB、中部地方 ALCe、リヨネ地方 ALLy、ジュラ・アルプス地方 ALJA、中央高地地方 ALMC、ガスコーニュ地方 ALG、ピレネー・オリアンタル地方 ALPO) が完結していた。このうちの ALMC、ALG、ALPO はオイル・フランス語域に属していない。

その後 2016 年の時点では、新たに3つの地域別言語地図 (シャンパーニュ・ブリ地方 ALCB、ロマンス語圏ロレーヌ地方 ALLA、フランシュ・コンテ地方 ALFC) と、オイル・フランス語域外の4つの地域別言語地図 (プロヴァンス地方 ALP、オーヴェルニュ・リムザン地方 ALAL、東部ラングドック地方 ALLor、西部ラングドック地方 ALLoc) が完成した。

5つの地域別言語地図 (ピカルディー地方 ALPic、ノルマンディー地方 ALN、イル・ド・フランス地方とオルレアン地方 ALIFO、ブルターニュ地方、アンジュー地方、メーヌ地方 ALBRAM、西部地方 ALO) は未完結である。ル・デュが嘆いているように、CNRS は 1990 年半ばに地域別言語地図を出版するための予算打ち切りを公にした (Le Dù 1997, Kawaguchi 2000)。資金が十分に得られなくなったことから、地域別言語地図は当初の計画どおり完結できない可能性が出てきている。

以上をまとめると、現代のフランス地理言語学の研究対象は、①先祖代々の伝統的語形と、②地域フランス語の2つであると言える。前者はほとんど実生活において用いられないため、文献学的研究が主になる。ただし、地域によって被調査者の受動的言語能力を調査する、つまり実際には用いないが、語形に関する言語知識を調べることは現在でも可能である。



#### 4. 地域フランス語研究

世界に先駆けて言語地理学を打ち立てたフランスであったが、ここにショッキングなデータがある。20世紀初頭のフランスとコルシカ島には方言学のセミナーを開講していた大学が19校あり、それぞれが積極的に方言研究を発信していた。ところが最近に至るまでそうした研究を継続しているのは、19大学のうち11大学に過ぎないのである。100年の間に研究拠点が半減したことになる。

ドーザの発案を継承した地域別言語地図は第二世代の言語地図と考えることができよう。その目的は、もはや消滅の危機にあった先祖代々の伝統的語形を記録するとともに、標準語化が進行する中で、各地域に特有の地域フランス語を記述することである。俚言は「中世の方言にまで遡り、傍層の様々な言語あるいは方言の影響を強く受けた語形」である。その一方、地域フランス語は「パリの規範が伝播していく中で結果として生じた語形であり、基層や傍層の影響を受けることが少なかった」(Morin 1994: 201)。しかも地域フランス語の形成される時期は、地域や社会的環境により異なっていた。たとえばパリのすぐ東に位置するブリ地方とシャンパーニュ地方では、標準語化は13世紀末からすでに起き始めていた。したがって、地域ごとに地域フランス語のあり様が違っており、このことが地域フランス語の正体を不明瞭にしていると言える。とくに3章で見たように、標準語化が急速に進展したオイル語域については、地域フランス語の実態を把握することが難しい。それに対して、伝統的な俚言が何らかの形で残存しているフランコプロヴァンス語域では、俚言との関係で地域フランス語を同定できるという(Vincenz 1974: 13)。俚言と地域フランス語のレジスターが異なっている場合は、両者の区別はさらに容易なようである(Martin 1997: 59)。

1976年ブルゴーニュ地方にある当時のディジョン大学 *Université de Dijon* に方言学者たちが集まり、地域フランス語をテーマとする会議が開催された。結びの中で主催者の一人であったジョルジュ・ストラカ *Georges Straka* は、もう一人の主催者ジェラルド・タヴェルデ *Gérard Taverdet* の定義を引用して以下のように述べている。

“ le français régional est la réunion [et non un système] de tous les faits linguistiques oraux ou écrits, positifs ou négatifs, produits par des utilisateurs de la langue française et limités sur le plan géographique à un point ou à un ensemble de points plus ou moins important.” (Straka 1977: 239)

「地域フランス語はフランス語の使用者の発出した話しことばと書きことばを含む、プラス面やマイナス面を伴った、あらゆる言語事実の集合で

あって【体系ではない】、そして言語事実の集合は地理上で1地点あるいはそれなりの数の地点に限定される。

地域フランス語がそれ自体「体系を成すことがなく、各地の言語使用を特徴づける地理言語学的な総体である」という考え方は、テュアイヨンの定義とも重なる (Tuailon 1977: 8; 1996 [1988]: 95)。そのため方言学者が記述した地域フランス語を見ると、音韻レベル、文法レベル、語彙レベルにおける例が散発的に記録されるに留まっていることが多い。加えて、言語意識の面からも地域フランス語の特徴がしばしば指摘される。ストラカヤルネ・ルペレ René Lepelley が言うように、方言(=俚言)の場合には、話し手がそれを異なる言語実体として意識しているが、地域フランス語の場合、話し手は標準語と比べてその地域性に気づかないまま使用している (Straka 1983: 39, Lepelley 1999: 11-13)。このことは現在のオイル・フランス語においてとくに顕著である。

地域フランス語が研究されるようになるずっと前から、ジリエロンは次のように書いている。彼はピカルディー地方の農業従事者が *je trouverai* 「私はみつめるだろう」と言うべきところを、*je trouverai* と書いたのを「田舎フランス語 *français provincial*」と呼んだが、この語形はまさしく地域フランス語にほかならない。続けてジリエロンは、その語形がピカルディー地方に特徴的であり、ベルギーに近いパ・ドゥ・カレ県 *Pas-de-Calais* から、パリの北に位置するソンム県 *Somme* に至るまで広く聞かれると述べている (Gilliéron 1887: 290)。この場合も話し手には標準語を使用しているという意識があった。ところで、こうした言語意識は地域フランス語の認定を複雑なものにする場合がある。ショーランがよい例をあげている。フランス北部では「彼は出費を惜しむ」は *il regarde à ses sous* と言う。ところがフランス中部などでは、*il plaint ses sous* と言うのである。標準語において基本動詞とみなされる *regarder* と *plaindre* が、この場合にどれほど地域的な性質を有しているのか、また話し手がそのことをどれくらい意識しているのか、これは大変難しい問題と言えよう (Chaurand 1992 [1985]: 416)。

1970年代から盛んになった地域フランス語研究であるが、今日では、ボンヌトン社 *Bonneton* からシリーズで『地域フランス語辞典』が刊行されている。また2001年に出版されたピエール・レゼー *Pierre Rézeau* 監修による『フランスの地域語法辞典：言語遺産の地理と歴史 *Dictionnaire des régionalismes de France: géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*』は、この分野の研究を代表する成果と言える。もっと簡単に地域フランス語について知りたい人には、マテュー・アヴァンズィ *Mathieu Avanzi* による『私たちの地域のフランス語地図 *Atlas du français de nos régions*』(2017) が良い入門書である。これらを覗いてみると地域フランス語の多くが想像していたよりもずっと広い範囲に広が

っていることに驚かされる。こうした特徴は俚言には通常みられない。地域フランス語の分布域がこのように広い点については、ローター・ヴォルフ Lothar Wolf の説明が説得的であろう。ヴォルフは地域フランス語をコイネー語形 (超地域的共通語形) が地域的な装いを身に着けた変種にほかならないと考える。コイネー語形は標準フランス語化を通じて、経済や文化の中心である町に拡がっていく。この過程を通して、その町の地域フランス語は影響を及ぼすことができる周りの地域においても採用される。こうして地域フランス語は各地域の共通語形を形成するようになり、結果として地理的な限定の緩い語形になる (Wolf 1972: 177)。

これまで述べてきた地域フランス語の用語は、ヨーロッパ以外のフランス語については一般に適用されない。そのためフランス語をより広い文脈に置いて考察する場合は、地域フランス語の用語と定義を再検討する必要がある。この点に関しては、ヨアヒム・レンガート Joachim Lengert の解説などが参考になる (Lengert 2015: 365-370)。以上、ここで説明した地域フランス語は、主にフランスの地理言語学者たちとその考え方に賛同する人たちの間で従来から用いられてきた定義であることを付言しておく。

## 5. コーパスとしての言語地図

ジャン・フィリップ・ダルベラ Jean-Philippe Dalbera によれば、第2世代の地理言語学は、第1世代で蓄積された調査法、記述法をより洗練し、地図ツールなどを開発することで、方言データを貴重な言語コーパスに作り上げていく (Dalbera 2007: 43-44)。ダルベラにとって言語地図は紛れもなく言語運用データで構成された言語コーパスなのである。エステル・ベウィール Esther Baiwir とパスカル・レンダース Pascale Renders も言語地図が言語コーパスなのかとの問いを立て、地理言語学のリソースの一つとして、情報処理によって利用可能になった言語地図は言語コーパスにほかならないと考える (Baiwir et Renders 2013: 36)。

近年のフランス地理言語学では、旧来からの言語地図の出版を継続するとともに、言語地図や方言データのオンライン化が急速に進められている。たとえば一部の地域別言語地図がオンライン化された。リヨネ地方の言語地図 ALLy (<https://www.ucl.fr/la-recherche/institut-chaire-projets-recherche/institut-pierre-gardette/ally-en-ligne/>) とピカルディー地方の言語地図 ALPic (<https://anr-api.univ-lille.fr/index.php/alpic/?db=2>) はウェブ上で閲覧可能である。

グルノーブル方言学センター Centre de dialectologie de Grenoble は、目下、フランス国内で最も活発な研究拠点の一つである。1995年には「フランコプロ

ヴァンス語とオック語境界のアルプス地域音声言語地図 *Atlas linguistique parlant d'une région alpine entre francoprovençal et occitan*」のサイトを公開した (<http://lulla00005.mutu.firsttheberg.net/centrededialectologie/atlas/couverture/index.html>)。この音声言語地図には ALF、ALJA、ALP のデータも含まれており、ラテン語から現在までの音声変化に関する地理言語学的分析も掲載されている。同センターはその調査地域を広げ、フランコプロヴァンス語域、オック語域の北東部、スイス西部、イタリア西部を対象とした「ローヌ・アルプス地域マルチメディア言語地図 *Atlas Linguistique Multimédia de la région Rhône-Alpes* (ALMURA) (<https://www.atlas-almura.net/>) を 2014-2015 年に開発した。この地図では日常生活において使われる約 800 項目について 45 地点で調査が行われた。

本稿ではオイル・フランス語の地域を対象とする研究について主に説明してきたが、言語地図に関して言えば、ベルギーではリエージュ大学が出版の責任を負うことで、1953 年以来、『ワロニー言語地図 *Atlas linguistique de la Wallonie* (ALW)』の出版が継続されている。さらに 1928-1940 年に出版されたカール・ヤーベルク Karl Jaberg 他『イタリアおよび南スイス言語・民俗地図 *Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz* (以下 AIS)』は ALF と並び称される優れた言語地図であるが、その一部にフランコプロヴァンス語域が含まれている。このほか、カナダのケベック州とその近隣、カリブ海の小アンティル諸島 (グアドループ、マルティニークなど)、インド洋のレユニオン島、南太平洋の仏領ポリネシアなどについても、それぞれ言語地図が存在する。

方言データのコーパス化という観点から優れた成果としては、オイル・フランス語を対象とするものではないが、『オック語方言辞典 *Thesaurus Occitan* (以下 THESOC)』(<http://thesaurus.unice.fr/>)がある。THESOC の扱っているデータは、オック語域と隣接する他の地域の方言データである。THESOC は 1992 年からダルベラが中心となり作業が進められた (Oliviéri et al. 2007: 96)。データとしては言語地図や学術出版物のほかに、現地調査で収集されたが未公開であった方言データを含んでいる。このプロジェクトではエクス・マルセイユ大学、ニース・ソフィア・アンティポリス大学、トゥールーズ・ジャンジョレス大学、リヨン大学といった国内の 4 大学と国内外の 5 つの研究機関が連携している。THESOC には、語彙の地理的変異を調べることに特化した語彙データベースと文レベルで検索するための形態統語モジュールがあり、機能が大変充実している。現行の THESOC は完成形ではなく、今後もデータの充実と機能の追加が図られる予定である。オイル・フランス語についても、THESOC のようなウェブ方言辞典が構築されることを強く望みたい。

## 6. 比較対照地理言語学

第2章において述べたように、フランス言語地理学は誕生の時以来、歴史言語学や比較言語学とともに発展してきた。この潮流は必然的に言語地図についても見られる。

第1の潮流は、ヨーロッパ全域の言語を比較対照しようとする巨大プロジェクト、『ヨーロッパ言語地図 *Atlas Linguarum Europae* (以下 ALE)』として結実した。プロジェクトは1970年に UNESCO の支援の下で始まった。その後1976年にはオランダ王立科学アカデミーの支援を受け、現在ではルーマニア科学アカデミー言語学研究所に事務局が設置されている。これまでに第1巻の第9分冊まで刊行されており、それぞれの巻は凡例の印刷された地図と個々の地図に関する解説を含んでいる。ALE は印欧語族はもとより、ウラル語族、アルタイ語族、バスク語、セム語族、コーカサス諸語を含んだ約90の言語と方言をカバーし、地点数は2631地点にのぼる (Viereck 2006: 58)。ALE は表現や文法項目を含まず、語彙に特化している。対象語彙は、①「空や天体、水、動植物」などの森羅万象、②「身体部位、動作、住居」といった人間に関連する語彙、③「空間や時間」などの概念語彙に分かれ、546の語彙項目を対象とする (Weijnen 1976: 25-89)。

第2の潮流は、1987年にグルノーブル方言学センターで、テュアイヨンとミシェル・コンティニ Michel Contini を中心として始まった『ロマンス言語地図 *Atlas Linguistique Romane* (以下 ALiR)』である。こちらは1996年に第1巻、2001年に第2巻 a、2009年に第2巻 b、2018年に第2巻 c を刊行した。ALE と同様、各巻には単語ごとの地図と解説がある。ALiR の目的はロマンス諸語を語彙、音韻、形態の様々な観点から研究するための基礎データを提供することである。地点数は1037地点を擁する。ALiR は既存の言語地図だけでなく、辞典などからも語形を採録している点で、従来の言語地図とは作成方法が異なっている。言語地図としては ALF と AIS のほか、既に完成しているロマンス語関係の言語地図が使用された。刊行中の『新コルシカ言語地図 *Nouvel Atlas linguistique de la Corse* (NALC)』も含まれる。辞典については、いずれも刊行途中の『スイスロマンド俚言用語集 *Glossaire des Patois de la Suisse romande* (GPSR)』と『グラウビュンデンロマンシュ語辞典 *Dicziunari Rumantsch Grischun* (DRG)』が使用された (Contini et Tuailon 1993: 4-7)。現在までに扱われている語彙は、昆虫、動植物、自然などである。ALE と ALiR はいずれも左端に凡例があり、各地点にはその凡例が記載されている。

## 7. まとめ

「私たちは巨人の肩の上に乗る小人のようなものだ。」このことばは1159年に英国の哲学者・歴史家のソールズベリのジョンが用いた比喻である。フランス地理言語学は、ジリエロンとドーザという二人の巨人の肩に乗って成立している分野と言える。現代の研究者たちはこの二人の上に乗っかって、地理言語学の地平を眺めているのである。

ジリエロンが残した言語地理学理論は今日もなお研究テーマとして議論され続けている。2002年に雑誌オルビス *Orbis* は、補遺 20 として、『言語地理学とことばの生物学：ジュール・ジリエロンを巡って *Géographie linguistique et biologie du langage : Autour de Jules Gilliéron*』を出版した (Lauwers, Simoni-Aurembou and Swiggers 2002)。また1998年には、ピュイ・ドゥ・ドーム県のティエール Thiers という町で、「アルベール・ドーザとオーヴェルニュ言語遺産会議 *Colloque Albert Dauzat et le patrimoine linguistique auvergnat*」が開催された。このように巨人たちの残した知的遺産を継承しようとする活動は地道に行われているものの、成立から100年以上経った今、フランス地理言語学の土台は盤石とは言い難い。とくに4章で述べた研究拠点の半減は気がかりである。1950年代から出版が始まった地域別言語地図の出版は未だに完結していない。他方で新たに始動した2つの大プロジェクト ALE と ALiR は、今後、地域別言語地図が経験したのと同様の経済的困難に直面するかもしれない。言語地図の出版には膨大な経費が必要である。解決策の一つとして、言語地図と方言データのオンライン化がある。5章の中でいくつか成功したと思われる例をあげておいた。しかし結局のところ、何処で誰がオンライン化するのかという問題は残ったままである。研究拠点の減少と予算の縮減は、本来大規模な研究予算を必要としない言語学分野において、例外的に経済的支援が必要とされる地理言語学と言語地図の未来に重い課題を突きつけていると言えよう。

## 参考文献

- Avanzi, Mathieu (2017) *Atlas du français de nos régions*. Paris: Armand Colin.
- Baiwir, Esther et Pascale Renders (2013) Les atlas linguistique sont-ils des corpus ?. *Corpus* 12: 27–37.
- Baiwir, Esther (2017) La géographie linguistique au nord du domaine d'oïl. In: Centre d'Études Médiévales et Dialectales (ed.) *Bien dire et bien apprendre 32 (Le picard moderne : un état de la recherche)*, 73–100. Villeneuve d'Ascq: Centre de gestion de l'édition scientifique.
- Bert, Michel et James Costa (2009) *Étude FORA : Francoprovençal et occitan en Rhône-Alpes*, Lyon: Institut Pierre Gardette, INRP, ICAR, DDL. [http://www.ddl.cnrs.fr/led-tdr/pageweb/sources/FORA\\_rapp.pdf](http://www.ddl.cnrs.fr/led-tdr/pageweb/sources/FORA_rapp.pdf) [accessed August 2021]

- Blanchet, Philippe (2007) Evolutions méthodologiques, théoriques et épistémologiques de la ‘dialectologie’ en France (et ailleurs). In: Raimondi et Revelli (2007), 13–18.
- Bouvier, Jean-Claude et Claude Martel (2016) *La langue d’oc telle qu’on la parle : atlas linguistique de la Provence*. Forcalquier: Alpes de lumière.
- Brun-Trigaud, Guylaine et Michèle Olivieri (2009) Le logiciel multimedial THESAURUS OCCITAN (THESOC). In: Horiot (2009), 61–80.
- Brun-Trigaud, Guylaine (2016) Vers un renouveau des atlas linguistiques régionaux ? *Géolinguistique* 16: 7–19. <https://journals.openedition.org/geolinguistique/444> [accessed August 2021]
- Chaurand, Jacques (1985) Les français régionaux. In: Antoine Gérard et Robert Martin (eds.) *Histoire de la Langue Française 1880-1914*, 339-368. CNRS. (Reprinted in: Jacques Chaurand (1992) *Les parlers et les hommes. Recueil de travaux inédits ou publiés revus et augmentés*. II, 371–417. Paris: SPM.)
- Contini, Michel (1992) L’Atlas Linguistique Roman : état d’avancement du projet. In: Real Academia de la Lengua Vasca (ed.) *Actes du Congrès International de Dialectologie, Iker* 7, 339–356. Bilbo: Euskaltzaindia.
- Contini, Michel (2016) Analyse contrastive de la prosodie dans les variétés romanes : un bilan de l’Atlas Multimédia Prosodique de l’Espace Roman et son élargissement à des nouvelles approches possibles. *Dialectologia. Special issue*, 6: 3–28. <http://www.edicions.ub.edu/revistes/dialectologiasp2016/> [accessed August 2021]
- Contini, Michel et Gaston Tuaille (1993) Introduction. In: Michel Contini et Gaston Tuaille (eds.) *Atlas Linguistique Roman, vol.1. Présentation*, 1–18. Roma: Istituto poligrafico e zecca dello stato/ Libreria dello stato.
- Dalbera, Jean-Philippe (2007) Linguistic Atlases – Objectives, Methods, Results, Prospects –. In: Yuji Kawaguchi et al. (eds.) *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*, 39–54. New York/Philadelphia: John Benjamins.
- Dalbera, Jean-Philippe (2009) Quel avenir pour la dialectologie. In: Horiot (2009), 455–468.
- Dalbera, Jean-Philippe (2013) La trajectoire de la dialectologie au sein des sciences du langage. De la reconstruction des systèmes dialectaux à la sémantique lexicale et à l’étymologie. *Corpus* 12: 173–200. <https://doi.org/10.4000/corpus.2390> [accessed August 2021]
- Dauzat, Albert (1906) *Essai de méthodologie dans le domaine des langues et des patois romans*. Paris: Champion.
- Dauzat, Albert (1922) *La géographie linguistique : avec 7 figures dans le texte*. Paris: Flammarion.
- Dauzat, Albert (1944) *La géographie linguistique : 9 cartes*. Paris: Flammarion.
- Dondaine, Colette (1977) Réflexions sur le français régional d’un village haut-saônois. In: Taverdet et Straka (1977), 51–63.
- Gamillscheg, Ernst (1928) *Die Sprachgeographie und ihre Ergebnisse für die allgemeine Sprachwissenschaft*. Bielefeld und Leipzig: Verlag von Velagen und Klasing.
- Gilliéron, Jules. (1887) Mélanges gallo-romans. *Bibliothèque de l’École des Hautes Études* 73: 285–299.
- Gilliéron, Jules et Edmond Edmont (1902) *Atlas linguistique de la France Notice servant à l’intelligence des cartes*. Paris: Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Edmond Edmont (1902-1920) *Atlas linguistique de la France*. Paris: Honoré Champion.
- Gilliéron, Jules et Edmond Edmont (1920) *Atlas linguistique de la France : Suppléments*, tome premier. Paris: Honoré Champion.

- Goebel, Hans (2013) Le Baiser de la Belle au bois dormant ou: des péripéties encourues par la géographie linguistique depuis Jules Gilliéron. *Corpus* 12: 61–84. <https://doi.org/10.4000/corpus.2311> [accessed August 2021]
- Goebel, Hans (2017) La romanistica svizzera e la nascente ricerca geolinguistica in Europa con particolare riguardo all'opera di Jules Gilliéron. In: Sandro Bianconi, Domenico De Martino e Annalisa Nesi (eds.) *La Romanistica svizzera della prima metà del novecento et l'Italia*, 11–34. Firenze: Accademia della Crusca.  
[https://www.sbg.ac.at/rom/people/prof/goebel/docs/Goebel2017\\_La%20romanistica%20svizzera.pdf](https://www.sbg.ac.at/rom/people/prof/goebel/docs/Goebel2017_La%20romanistica%20svizzera.pdf) [accessed August 2021]
- Hall, Damien (2011) Un nouveau projet de dialectologie française: Towards a New Linguistic Atlas of France. *Langage et société* 136: 129–138. <https://www.cairn.info/revue-langage-et-societe-2011-2-page-129.htm> [accessed August 2021]
- Hall, Damien (2013) The Linguistic Geography of the French of Northern France: Do We Have the Basic Data? *Language and Linguistics Compass* 7(9): 477–499. <https://doi.org/10.1111/lnc3.12046> [accessed August 2021]
- Hall, Damien (2018) Dialects of French. In: Charles Boberg, John Nerbonne and Dominic Watt (eds.) *The Handbook of Dialectology*, 474–485. Hoboken, New Jersey: Wiley Blackwell.
- Haust, Jean (1953-) *Atlas linguistique de la Wallonie*. Liège: Université de Liège.
- Horiot, Brigitte (ed.) (2009) *La dialectologie hier et aujourd'hui (1906-2006)*. Lyon: Centre d'Etudes Linguistiques Jacques Goudet.
- Jaberg, Karl und Jakob Jud (1928-1940) *Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz*. Zofingen: Ringier.
- Jones, Mari C. (2011) Diatopic variation and the study of regional French. *French Studies* 65(4): 505–514. <https://doi.org/10.1093/fs/knr077> [accessed August 2021]
- Kawaguchi, Yuji (2000) Fernand Carton/Maurice Lebègue, Atlas Linguistique et Ethnographique Picard, vol.2. *Zeitschrift für romanische Philologie* 116(3): 557–559.
- Kawaguchi, Yuji (2018) Reflexion géolinguistique sur le mot *sel*. *Géolinguistique* 17: 7–22. <https://journals.openedition.org/geolinguistique/355> [accessed August 2021]
- Kawaguchi, Yuji (2020) Standardization and distance - Case of Linguistic Atlas of Champagne and Brie (ALCB). In: Yoshiyuki Asahi (ed.) *Proceedings of Methods XVI, Papers from the sixteenth international conference on Methods in Dialectology 2017*, 269–276. Berlin: Peter Lang.
- Lauwers, Peter, Marie-Rose Simoni-Aurembou and Pierre Swiggers (2002) *Géographie linguistique et biologie du langage: Autour de Jules Gilliéron*. *Orbis Supplementa* 20. Leuven: Peeters.
- Le Dù, Jean (1997) La disparition du groupe des atlas et l'avenir de la géographie linguistique. *Le Français Moderne* 65(1): 6–12.
- Le Dù, Jean, Yves Le Berre and Guylaine Brun-Trigaud (2005) *Lectures de l'Atlas linguistique de la France de Gilliéron et Edmont: du temps dans l'espace: essai d'interprétation des cartes de l'Atlas linguistique de la France de Jules Gilliéron et Edmond Edmont*. Paris: Editions du Comité des travaux historiques et scientifiques.
- Le Dù, Jean (2007) Espace et diachronie: le atlas linguistiques, une fenêtre sur le passe des langues. In: Raimondi et Revelli (2007), 99–114.
- Lengert, Joachim (2015) 16. Les français régionaux. In: Polzin-Hausmann et Wolfgang Schweickard (eds.) *Manuel de linguistique française*, 365–400. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Lepelley, René (1999) *La Normandie dialectale. Petite encyclopédie des langages et mots régionaux de la province de Normandie et des Iles anglo-normandes*. Presses Universitaires de Caen.



- De Mareüil, Philippe Boula, Frédéric Vernier and Albert Rilliard (2017) Enregistrements et transcriptions pour un atlas sonore des langues régionales de France. *Géolinguistique* 17: 23–48. <http://doi.org/10.4000/geolinguistique.365> [accessed August 2021]
- De Mareüil, Philippe Boula, Frédéric Vernier and Albert Rilliard (2018) A Speaking Atlas of the Regional Languages of France. In: Nicoletta Calzolari et al. (eds.) *Proceedings of the 11th International Conference on Language Resources and Evaluation* (LREC 2018), 4133–4138. European Language Resources Association. <https://aclanthology.org/L18-1652.pdf> [accessed August 2021]
- Martin, Jean-Baptiste (1997) Le français régional: la variation diatopique du français de France. *Le Français moderne* 65(1): 55–69.
- Meillet, Antoine (1921) *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: Honoré Champion.
- Meillet, Antoine (1925) *La méthode comparative en linguistique historique*. Oslo: H. Aschehoug & Co.
- Morin, Yves-Charles (1994) Les sources historiques de la prononciation du français du Québec. In: Raymond Mougeon et Edouard Beniak (eds.) *Les origines du français québécois*, 199–236. Les Presses de l'Université Laval. [http://ycmorin.net/wp-content/uploads/2012/11/1994\\_Sources\\_prononciation\\_Quebec.pdf](http://ycmorin.net/wp-content/uploads/2012/11/1994_Sources_prononciation_Quebec.pdf) [accessed August 2021]
- Olivieri, Michèle, Sylvain Casagrande, Guylaine Brun-Trigaud and Pierre-Aurélien Georges (2007) Le Thesaurus occitan dans tous ses états. *Revue Française de Linguistique Appliquée* XXII: 89–102. <https://www.cairn.info/revue-francaise-de-linguistique-appliquee-2017-1-page-89.htm?ref=doi> [accessed August 2021]
- Pooley, Tim (2006) On the geographical spread of Oil French in France. *Journal of French Language Studies* 16: 357–390. <https://doi.org/10.1017/S0959269506002560> [accessed August 2021]
- Raimondi, Gianmario et Luisa Revelli (eds.) (2007) *La dialectologie aujourd'hui : atti del convegno internazionale "Dove va la dialettologia?"*, Saint-Vincent, Aosta, Gogne. Alessandria: Edizioni dell'Orso.
- Rézeau, Pierre (2001) *Dictionnaire des régionalismes de France: géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*. Bruxelles: Duculot.
- Romano, Antonio, Michel Contini et Jean-Pierre Lai (2014) L'Atlas Multimedia Prosodique de l'Espace Roman : uno strumento per lo studio della variazione geoprosoica. In: Fabio Tosques (ed.) *20 Jahre digitale Sprachgeographie*, 27–47. Berlin: Humboldt-Universität / Institut für Romanistik. [https://www2.hu-berlin.de/vivaldi/tagung/beitraege/pdf/03\\_romano\\_contini.pdf](https://www2.hu-berlin.de/vivaldi/tagung/beitraege/pdf/03_romano_contini.pdf) [accessed August 2021]
- Séguy, Jean (1973) Les Atlas linguistiques de la France par régions. *Langue française* 18: 65–90. [https://www.persee.fr/doc/lfr\\_0023-8368\\_1973\\_num\\_18\\_1\\_5631](https://www.persee.fr/doc/lfr_0023-8368_1973_num_18_1_5631) [accessed August 2021]
- Simoni-Aurembou, Marie-Rose (2004) Les Atlas Linguistiques de la France par régions. *Flambeau* 30: 1–22.
- Storost, Jürgen (1994) Noch einmal: Zur Diez-Stiftung. *Romanistisches Jahrbuch* 45: 74–84.
- Straka, Georges (1977) Les français régionaux. Conclusions et résultats du colloque de Dijon. In: Taverdet et Straka (1977), 227–242.
- Straka, Georges (1983) Problèmes des français régionaux. *Bulletin de la Classe des lettres et des sciences morales et politiques, sér. 5, Académie royale de Belgique*, vol. 69: 27–66. [https://www.persee.fr/doc/barb\\_0001-4133\\_1983\\_num\\_69\\_1\\_55599](https://www.persee.fr/doc/barb_0001-4133_1983_num_69_1_55599) [accessed August 2021]
- Taverdet, Gérard (1977) Le français régional dans la Côte bourguignonne. In: Taverdet et Straka (1977), 35–42.
- Taverdet, Gérard et Georges Straka (eds.) (1977) *Les français régionaux. Colloque sur le français parlé dans les villages de vigneron*. Paris: Klincksieck.

- Tuaillon, Gaston (1976) *Comportement de recherches en dialectologie française*. Editions du CNRS.
- Tuaillon, Gaston (1977) Réflexions sur le français régional. In: Taverdet et Straka (1977), 7–29.
- Tuaillon, Gaston (1988) Le français régional: formes de rencontre. In: Geneviève Vermès (ed.) *Vingt-cinq communautés linguistiques de la France*. Tome 1 : Langues régionales et langues non territorialisées, 291–299. Paris: L'Harmattan. (Reprinted in: Malcom Offord (ed.) (1996) *A Reader in French Sociolinguistics*, 95–102. Multilingual Matters.)
- Tuaillon, Gaston and Michel Contini (1993) *Atlas Linguistique Romane (ALiR) Volume I Présentation*. Roma: Istituto Poligrafico e Zecca Dello Stato.
- Viereck, Wolfgang (2006) The Linguistic and Cultural Significance of the Atlas Linguarum Europae. In: 川口裕司(編)『言語情報学研究報告9』, 58–80. 東京外国語大学大学院21世紀COE. [http://www.coelang.tufs.ac.jp/common/pdf/research\\_paper9/title\\_09.pdf](http://www.coelang.tufs.ac.jp/common/pdf/research_paper9/title_09.pdf) [accessed August 2021]
- Vincenz, André de (1974) *Disparition et Survivances du Franco-Provençal, Étudiées dans le lexique rural de La Combe de Lancey (Isère)*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Weijnen, Antonius Angelus (1976) *Atlas Linguarum Europae. Premier Questionnaire*. Assen: Van Gorcum.
- Wolf, Lothar (1972) Le français régional. Essai d'une définition. *Travaux de Linguistique et de Littérature* 10: 171–177.
- 大河原香穂・清宮貴雅・伊藤玲子・川口裕司 (2020)「フランス方言学の現状 Elisabetta Carpitelli」第166回変異理論研究会口頭発表・オンライン開催, 2020年10月17日. [http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/assets/images/202010\\_HeNiriron.pdf](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/assets/images/202010_HeNiriron.pdf) [accessed August 2021]
- 本報告はグルノーブル・アルプ大学の Elisabetta Carpitelli 教授が 2017 年 5 月 22 日に東京外国語大学語学研究所で行った講演に基づいている。
- 川口裕司 (2018) 「フランス語における「雌馬jument」再考」『語学研究所論集』22: 1–18. [http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/contents/ronshuu/22/jilr\\_22\\_article\\_kawaguchi.pdf](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/contents/ronshuu/22/jilr_22_article_kawaguchi.pdf) [accessed August 2021]
- 矢島猷三 (1973) 「フランスにおける言語地図について」『ロマンス語研究』7: 13–20. [http://sjsrom.ec-net.jp/studrom/007/studrom\\_007\\_002.pdf](http://sjsrom.ec-net.jp/studrom/007/studrom_007_002.pdf) [accessed August 2021]

## 出版情報

採用決定日：2021年8月26日